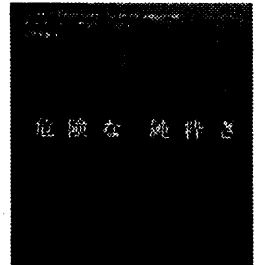


不純さの擁護と西欧民主主義の蹉跎

ベルナル=アンリ・レヴィ著 危険な純粋さ

昨年、堺や四日市をはじめとして、日本の港湾都市のいくつかで発生した「毒グモ騒ぎ」、日本の病理学を覗いたのは、小説家にして分析哲学者の三浦俊彦



立花 英裕訳 46判・286頁・2200円 紀伊國屋書店

異物共存の論理を求めて

「原理主義」を敵とする立場から

稲賀 繁 美

版同時現象だ。その限りでは、本書は題名からして明瞭だ。病原体を除去して、共同体本来の純粋さを復活しようとする運動、それが民族浄化として、ルワンダからボスニアへ、ロシアのジリノフスキーからイスラーム原理主義者たちに至る、広範な「浄化」運動を引き起こしている。そこでは異民族浄化は手段ではなく、それ自体が目的なのだ。純粋無垢なる真理や、信徒の純一性(アンテクリテ)、民族の純血を表現する「原理主義」のインテリナショナルが、ベルリンの壁崩壊後の世界に、急速に蔓延しはじめてい

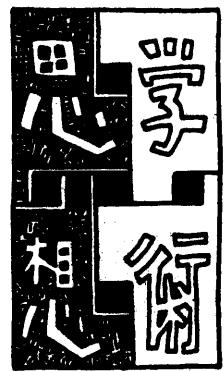
を我勝ちに求めるのか。「アジア系外国人学生」や「帰国子女」を排斥する不寛容な情緒は、一元的「センター試験」のイデオロギーとも無縁ではあるまい。

「純粋さへの意志」をもつ幾多の運動が、表面上は対立し、また同一の領土で共存できないくせいで、その運動の方向においては連帯するばかりか、しばしばお互いに公然とエールを交換し合っている。この「不思議な秘密結社」それらが共通して排除しようとするのは、疫病であり、化膿であり、細菌だ。ベストとしてのユダヤ人という比喩。他人ごとではない、日本の半

偏執狂」を指弾する知識人たる著者は、民の蒙昧なる力の前に無力な良心までさらけ出す。純粋さの支配に抵抗しつつも、純粋さの実現を目指す敵の消滅という「純粋さ」を自らに禁じる思想の闘争を是認する著者は、闘争を是認する土壌の設定と、かかる土壌を純粋さから保護する権力の設定にまつる政治学的要請

のあいだで、原理主義には原理的に敗北しかねぬ悪循環を自らに課しているのではないだろうか。原理主義側からの思想的反論は「民主的」対話たりうる可能性からあらかじめ排斥し浄化されるのが論理的帰結なのだろうか。(いなが・しげみ氏「三重大学助教授・フランス文学・比較文化専攻」)

★ベルナル=アンリ・レヴィ(一九四八)はフランスの哲学者、高等師範学校卒。ヌーヴォー・フィロソフ(新哲学者)の代表的リーダー。著書に「人間の顔をした野獣」「フランス・イデオロギー」など。



稲賀繁美「絵画の黄昏」朝日(糸島)1997. 3. 1.

スック・東海

十九世紀のフランスの画家・マネは今日、「近代絵画の最も重要な推進者の一人」(新潮世界美術辞典)と位置づけられている。しかし「一八八三年四月三〇日にマネが死去した時点では、彼の死後の栄光は必ずしもまた十分に保証されていたわけではなかった」と著者はいう。

資料で読み解くマネの神話

こうした事実から著者は「マネをフランス十九世紀後半の美術史を代表する画家として創出する現場は、じつはマネ没後と(科学的な)マネ研究以前との間にあったのではなからうか」と指摘。読みやすいとはいえないが、刺激に富んだ意欲的な研究書だ。著者は一九五七年生まれの三重大学文学部助教授。

(装丁・石川九揚、名古屋大学出版会・四、九四四円)